



## ■ 人生観

## ■ 人生の三本柱

---

- Art (芸術)
- Spirituality (魂の記憶、靈感)
- Reality (現実、身体)

Spirituality と Reality は表裏一体。どちらにも転換する。  
自分はどっちにいるのか？曖昧で危うい感覚…  
その感覚を Art で表現することが今世の課題。

## ■ usi バックグラウンド (1)

### ■ サプライズ、そして有頂天

---

僕は、生まれも育ちも小坪です。父の転勤で4年間東北に住んでいましたが、再び高校1年の春、帰って来ました。

しかし、地元に戻るとは言っても僕は転校生、孤独感や不安でいっぱいです。

転校初日、先生に連れられて教室に入ると、パッと一斉に皆の視線が僕に集まるのを感じます。教壇で皆に向かって挨拶し、そして自分の席につこうとした時、誰かが「ウシタロウ！」と呼びました。その時は何のことか分からず、どう反応していいのか困りました。休み時間、皆が僕の席に集まってきた“ウシタロウ”について説明してくれます。「こんど転校してくるヤツって松坂っていうんだってよ、じゃあ“牛太郎”って名前にしようぜ」と、僕のニックネームを皆で決めていたのです。僕はそのことを聞いた途端に目の前が明るくなり、緊張感も一気に吹き飛ばしてしまいました。

まだ会ったこともない僕に、皆でニックネームを考えてくれていたなんて感激。

皆は冗談のつもりだったらしいのですが、僕にはうれしいサプライズでした。

以来、僕はその名前が気に入ってしまい、自分から“ウシタロウ”と名乗っています。そして今では「うし=usi」という名が定着しています。

## ■ usi バックグラウンド (2)

### ■ 霊体験

---

僕は、幼い頃から多くの霊体験をしています。それは、自然の摂理なのか？ この世の法則？ 万物のあり方？ そして、自分の存在は何なのか？

数多くの体験談の中から“気配”に関することをご紹介します。

幼少から、普段の生活の中で頻繁に視線を感じるがありました。

幼稚園～小学生の頃でした。トイレに入っている時、廊下を歩いている時、“気配”を感じると、サッと振り向いてみます。すると自分より少し年上の女の子がいます。しかしその子は、振り向いた瞬間に物陰に隠れてしまいます。僕はすかさず、その子が隠れたところに行ってみますが誰もいません。恥ずかしがり屋さんのようです。姿は全身をストッキングで覆ったようにのっぺりとしていて茶色です。顔も分からないし服装も分かりませんが、その子は“女の子”で、自分より“2歳くらい年上”です。そう感じる、分かるのです。

夕方や夜になると、家の外から何かを感じることもあります。

小学校低学年の頃でした。隣家の幼友達の家で遊んでいて夕方になり、玄関先で別れようとしていると、どこからともなく僕の名前を呼ぶ声がします。その声は、遠くから風に乗って聞こえてきます。微かな声です。いや声なのか分かりません。とにかく不思議な“声”です。友人に「声、聞こえる？」と聞くと、最初は気づかなかった彼も「ほんとだ！」と言って、二人で「不思議だね～」と言ったのを覚えています。

夕暮れ時、僕は夕飯の支度をしている母親の側にピッタリと寄り添っています。すると、外から呼ばれているような気がします。気になって勝手口のドアから、外を伺うのですが、誰もいないし声もしません。ただ“呼ばれている気配”だけを感じるのです。母に寄り添っていたのは、この“気配”から身を守るためだったと思います。

今でも時々、“呼ばれている気配”を感じるがあります。仕事が遅くなって明け方に風呂に入ることが多いのですが、その時ふと外から“呼ばれている気配”を感じるがあります。そんな時は風呂の窓を開けて、白々と夜が明けてくる外をボーッと眺めています。

幼い頃は不思議だったその感覚は、今では微かなものになり、甘美な誘惑です…

## ■ 創作の世界観 (1)

### ■ スピリチュアルなイメージ

---

僕には生まれつき意味も分からず持っている、ある感覚があります。

それは、幼少から形成されてきた人格なのか？ 前世から受け継がれている記憶なのか？

自分が幼い頃から抱いている不思議な感覚。それは…

- ・ 光源の分からない朧げな光と空間。そこに自分の意識があるようだ。  
そこからの光景は視覚ではなく感覚で見る。それは深い緑色、時空を貫く光「usi-Green」
- ・ 隙間の向こうから射し込む光。“その先”にある誘惑感「Spiritual Light」
- ・ 幼少の“ある時”から別の時間軸へ迷い込んだ感覚。その分岐点の印象は強く残っている。今の自分の存在は？ 平行時空 (パラレルワールド) や多次元性といった感覚。

自分は何なのか？ どこにいるのか？

“魅惑”でもあり“おそれ”でもある表裏一体の感覚。

向こうとこっち (あの世とこの世？)、その繋がりや、共鳴、反響、

どっちがどっちだか判らない混沌とした危うい感覚。

終わりのない夢を見続けているのか？ 幻想なのか？

そんなスピリチュアルな感覚の中でも分かりやすいのは霊体験。

僕の体験は比較的、現世の常識を踏襲している。姿を見たり、声を聞いたり、金縛りや予感といったもの。今では周囲に理解者や同じ体験者が多くいるので、自分の経験と他人の体験を多く収集することで、何かを悟れたら…と思っている。

ピカソやブラックの作品には、共感する部分がある。物の存在、光、時間、記憶、音、匂い、様々な感覚が再構成されているのを感じる。

まさに僕の中にある、スピリチュアルで“危うい”感覚だ。

黒澤 明は、フィルムに映らないはずのセットの裏側も作り込んだそう。たとえ映らない物でも“気”がフィルムに焼き付くという。

視覚ではなく感覚が伝わる。意識が自分から離れて、何かに (どこかに) 移る、籠る、という感覚を持つ僕にとっては、まるで自分の事のように。

## ■ 創作の世界観 (2)

### ■ 故郷への想い、遺伝子に刻まれた「日本人」

---

なぜか、常に愛おしく郷愁を覚える＝小坪

故郷への愛着とこだわりは強い。多感な 10 代で生まれ故郷を離れたことによる望郷の念、そして自分がどう受け入れられるか不安だった帰郷。ここで生まれ、育ち、今もここにいる。日々幸せを感じている。地面に咲くタンポポを見かけただけでも、この時間が永遠に続けば良いのに…と想うことがある。

#### ・心惹かれる風景“名越切り通し”

その切り立った岩の間から漏れてくる光は、美しくも怖い。

自分が住んでいるこの山は、その昔、狐火が現れた場所だ。今でも狐に化かされる人がいる。ここは霊場である。

故郷だから惹かれるのか？霊場だから怖いのか？いや、全く違う。

生まれ育った環境にはリスペクトされつつも、自分のイマジネーション原点はもっと違うところを感じる。生まれつき持ったスピリチュアル感覚と向き合い、自分の存在原点を模索している、という表現の方が近いかもしれない。真実はわからない。

マティスはコートダジュールを想わせる鮮やかで躍動的な作品が印象的だが、かつては生まれ故郷北部のモノトーン調の作風。そして最晩年の教会壁画でもモノトーンのドローイングで表現している。

洗練の境地に至った結果か？体力の衰えか？生まれ故郷への回帰か？

いや、それ以上の不思議な力を感じる。静寂、鎮魂、悟り。超越した精神性、霊的な何かを感じてならない。マティス教会壁画には惹かれる。

自分を、感覚の研ぎすまされた自然体に保つ。“純度の高い天然”  
魂に正直に。

感覚は無限に。

人間＝自然＝宇宙は繋がる事が出来る。

そんな精進をしいていきたい。僕にも何か悟りがあるかもしれない。

## ・心安らぐ風景“小坪から見る海”

鎌倉の海岸、稲村ヶ崎、江ノ島、その向こうには富士山が鎮座している。世界にはもっと美しい風景や絶景もあるが、やはり心落ち着く。優しい気持ちになれる。

葛飾北斎や歌川広重の作品は、人々の生活を躍動的に捉えた見事な浮世絵であるが、それにとどまらず、人と自然のつながり、この世の成り立ちを感じる。

人生波瀾万丈。喜怒哀楽。愛。誕生と死。そして、生きる。受け継がれる。

人は自然に生かされている、富士山は人々の生活をただ静かに見守っている。

東山魁夷は自らの創作について「事象を写すのではなく、生命の発言を誇張することなく、素直に感じとること」と語っている。また、「描くことは祈ること」とも。彼は修行僧の如く敬虔な思いで、自然（神）と向き合っているのだろう。さらに、自分の中にも宇宙を感じ、自分と向き合っているのかもしれない。

“お天道様、富士山信仰、一期一会、わび・さび、精進料理”といった日常の和の心得には、自然を敬い、命を尊び、人に誠意を尽くし、慎ましく美しく生きること、という観念がある。誰に教わった訳でもなく日本人が生まれながらにして直感的に知っていることだ。遺伝子に刻み込まれた感覚なのだろう。

生活の中に神がある。

日本人の中には日本人の神がいる。

僕の中には僕の神がいる。

感覚を研ぎすまし、毎日をひたすら“感じて”“生きる”こと「FEEL・LIVE」

それが誠意ある生き方であり、自然への敬意ではないだろうか。

僕にとって創作とは、ただ単に好きだという“気持ち”の問題ではない。

もっと魂から湧き出る、生きる“感覚”である。

創造力を欲し、創作に陶酔し、作品＝自分と向き合う。それを受入れる、納得する。

その繰り返しは、自分を探求し靈格に磨きをかける、生きる意味そのものかもしれない。